

タイトル：2020 年度教育セミナー（第 16 回）

日時：2020 年 9 月 17 日（木）～20 日（日）

オンライン開催

「インタビューとアンケートによるデータの収集：トルコ語調査での活用例」

林 徹（放送大学）

自分の母語でない言語（私の場合はトルコ系の言語）であっても、長年研究していると、なんとなく、これはこうだろう、こうに違いない、こうに決まっている、というような直感が働くようになる。それらは、もちろん具体的な根拠がある場合もあるが、たまたま見聞した断片的エピソードが自分の無意識の思い込みと都合よく混合して、根拠のない確信となり、最悪の場合、自分の中で事実と区別できなくなっていたりすることもある。このような誤解を避けるには、面倒でもその都度一次資料に当たればよいのだが、相手が文献資料の場合でも母語話者の場合でも、このような確認作業は結構面倒な場合が多い。それでも、母語話者への確認はやったほうが良いと思う経験を 4 つ紹介する。まず、2 つのインタビュー調査の紹介から。

新疆ウイグル自治区南部には、周囲のウイグル族の人々からアブダルと呼ばれる集団がいて、この地域でもっとも優勢な言語であるウイグル語とは異なる言語を話しているという情報は、以前から知られていた。私も、ウイグル語とペルシア語との混成言語ではないかと思っていた。しかし、当該地域の 4 地点で語彙調査票を使ったインタビュー調査をした結果、ごくわずかの非ウイグル語語彙（多くはペルシア語由来）をウイグル語の語彙の代わりに使う秘密語であることがわかった。混成言語と言えないことはないものの、その成立過程には、意図的な言語の操作が含まれていたと考えるほうが妥当である。

次に紹介するのは、やはり調査票を使ったインタビュー調査で、トルコ西北部ボル県における方言調査で、ここは多くの等語線（同じ言語特徴が分布する境界線）が重なる地域として知られている。例えば、マルマラ地方（イスタンブルを中心とするトルコ北西部）では「娘・嫁」を kiz（クズ）と発音するが、中央アナトリア地方（アンカラなどトルコの中央部）では giz（グズ）と発音する。その境界が、稜線や川などの自然地形と重なることを期待して、ボル県の 90 地点で同じ質問を繰り返した。しかし、実際に調査してみると、等語線は「線」ではなく、幅の広い「帯」だった。ボル県全域で、kiz と giz の両方の発音が観察されたからである。同一人物がどちらも発音する場合さえあった。はっきりした境界線は見つからず、むしろ giz から kiz への変化が、県全域で少しずつ進行していると考えべきだろう。

残りの 2 つは、ベルリンでトルコ系（トルコから移住した人、あるいはその子孫）の生徒に対し行ったアンケート調査の体験である。まず、2000 年から 2015 年まで、5 年おきにほぼ同じ調査票を使って数十人から百数十人の生徒を対象に行った 4 回のアンケート

調査について。このアンケートからは、トルコ語とドイツ語のバイリンガルである生徒たちの言語使用において、次第にドイツ語が優勢となっていく様子が明らかになることを期待していた。ベルリンのトルコ系住民から繰り返し聞かされる、トルコ系であるのにろくにトルコ語が話せない子供や若者の話が真実に思えたからである。しかし、期待に反して、そのような明確な変化はアンケートの結果から読み取れなかった。

もうひとつのアンケート調査は、トルコ語の指示詞の用法について、イスタンブールの生徒たちとベルリンの生徒たち（ほぼ同じ年齢グループ）を対象として実施したものである。このアンケートでも、目的はベルリンの生徒たちのトルコ語がドイツ語の影響により変化していることを明らかにすることだった。具体的には、日本語のコ、ソ、アと同じく3系列の指示詞（bu, şu, o）を持つトルコ語が、2系列の指示詞（dieser, jener）を持つドイツ語の影響により、2系列化、つまり、3つの指示詞のうちのどれかが使われなくなりつつあることが、アンケートから明らかになることを期待した。ところが、これも期待に反し、イスタンブールの生徒たちの回答パターンと、ベルリンの生徒たちの回答パターンとの間に、ほとんど差は見られなかった。以上をまとめると、2つのアンケート調査からは、今や第3世代が主体となりつつあるトルコ系移民の間で、トルコ語の知識が依然維持されているという、一般に共有されている認識とは異なる結果が得られたことになる。

今回紹介したインタビュー調査やアンケート調査の結果は、いずれも当初想像していたものとは異なっていた。やらなければよかったと思うことがなかったわけではないが、新進の研究者の皆さんには、そんなことを心配することなく、気軽にインタビューやアンケートに取り組んでほしい。